「船遊び」と「仕切り根性」①

元おやさと研究所長
井上　昭夫　*Akio Inoue*

2008年のある夏の夜、３代真柱様から突然自宅に電話がかかってきた。今までにないことであるから、翌日出発するアフリカ行の準備をしていたわたくしは、一瞬何事かと緊張して立ち上がった。「井上すまんが、北門まで一寸来てくれないか」というお言葉である。急いで自転車を飛ばして北門に向かった。ベルを押すと来るのを待っていたかのように、真柱様は出入り口になっている東の小扉を自らお開きになり、にっこりとして私に茶色の封筒を「これを向こうで何かに使ってほしい」と言われ、こちらが「ありがとうございます」と分厚い封筒を両手で受け取り頭を深々と下げ、顔をあげると、くらやみの中、お宅の方へ独りで歩いて消えて行かれた。それはまさにわたくしにとっては、夢のような瞬時の出来事であった。

1999年４月、天理大学おやさと研究所長の任に命じられたわたくしは研究所のあらたな事業の要として、建学の精神に戻るべく教学共同の国際参加プロジェクトのモデルを検討することにしたのである。そのゆえか2002年天理大学組織改革によりあらたに発足した国際地域文化研究センターの所長を兼務することとなった。さらなる大役を仰せつかったわたくしは毎月欠かさず、真柱様に研究所とセンターの企画と活動報告書をＡ４用紙にまとめ、諸企画のご報告とご助言をいただくために、お宅の北洋間でお話を聞いていただいた。それ以前のわたくしは、海外布教伝道部アメリカ課長から教庁の表統領管轄下に置かれた教養問題研究室に派遣されていた。ここでは主として教内外に向けた月刊誌『Ｇ－ＴＥＮ』の編集責任者として出版をすること。そして、天理やまと文化会議においては事務局長として、学際的な諸国際シンポジウムの企画・実践の仕事にかかわっていた。２代真柱様の通訳に引きつづき、３代真柱様にも前述の役職としてお使いいただいていたのである。

真柱様にご面談をいただいた時間は、先にご来客との約束があるからという理由で半時間くらいのときもあったが、平均約60分、お疲れのところをながくてなんと２～３時間の貴重なお時間を割いてくださることが度々あった。思い返せば、真柱様にはいつお伺いしても泰然自若として心棒強く話をお聞きいただき、ときにはうなずいたり、沈黙のあと、鋭い問いかけやヒントを与えてくださった。そのときを走馬燈のように振り返ってみると、当方の企画に関する目的だけでなく、おこがましくも、期待される効果についてのわたくしからの一方的な希望的話しの方が多かったように思う。ご面会が終わると、わたくしにはこの企画はかならず成功するという自信をいただいたことが不思議であった。

2008年、最後のご面会に割いてくださった年である。貧困緩和自立支援活動と称して第３回目のアフリカ渡航前のことだ。真柱様はそれまでに心臓手術を一度ならずなされ、体力が落ちていることを一言もお口に出されず「仕切り根性」に徹して信者の隅々にまで親ごころをもってお導きいただいたことは教内ではだれも知らない者はない。この最後にご面談をいただいたときのことをはっきりと覚えている。北洋間を出られるときに、真柱様は「もうわしの足はぐちゃぐちゃや」という意味のことをつぶやくように言い遺された。北洋間を後にされた後ろ姿を拝して、「ようしやらせていただくぞ」という初志貫徹の気迫がそのとき、72歳だったわたくしに湧いてきた。

真柱の理を善司様に継承されたのは、1998年であるから、そのときから10年後のことである。わたくしもこの年の10月アフリカから帰国した翌日、大学の会議でアフリカでの活動報告をした直後、突然脳梗塞に襲われて入院することとなった。大学も退職を余儀なくされ、それ以来、まことに残念であったが３代真柱様にはご面談する機会を失してしまった。したがって、この思い出集の拙文は、親ごころにあまえて３代真柱様の御霊に、帰国ご報告の心つもりで書かせていただくこととした。考えてみると、このアフリカでの貧困緩和自立支援と称した活動は、横浜で開催されたTICAD Ⅳのアフリカ大陸国際会議において、東アフリカ５カ国の大使との事前合同会議で了解を得て、とくにウガンダを主体としたヴィクトリア湖に面する5,000坪に相当するゆるやかに傾斜する地域に、土嚢ドームでエコ・ヴィレッジを共同建設するという壮大な計画を核としていた。そのために天理大学南東のおやさとやかたの一角にこの土嚢群のモデルを立ち上げたが、残念ながら現在はなぜか取り払われている。しかしこの天理エコモデルデザイニングセンターと称する土嚢ドーム群モデルを諸アングルから撮影した写真が、大使たちに説得力を発揮したのである。くわえて土嚢ドーム群建設は、後ほど広島に発足した国連ユニタールの特別上席顧問として発案したものでもあり、毎年30名をアフガニスタン政府が派遣する広島における訓練生が研修の仕上げとして、この天理大学のセンターで土嚢建築の意義と技術を学び、それを祖国各地において活用・実践することを目的としていた。

さてヴィクトリア湖はダーウィンの「生物多様性の宝庫」として知られる世界第２位を誇る巨大な淡水湖である。沿岸には漁村がおおく、農業だけでなく漁業で生計を立てている貧しい人々も多い。しかし漁船の数も不十分で、ケニア、ウガンダ、タンザニアの３カ国に面しているこの湖に客船は一艘しかなく、それもいまは沈没して存在していないという惨状であった。そこで立ち上がってきた幻想は、『稿本天理教教祖伝逸話篇』168「船遊び」の「一度船遊びをしてみたいなあ。わしが船遊びしたら、二年でも三年でも、帰られぬやろうなあ。」という教祖の海外伝道を思わせるお言葉と、宇宙船も「船だ」という着想であった。この直感は、当時「こうき話」に見られる裏守護星象の天文学的研究や、生命生態学者三木成夫が胎児の解剖を通して証明して見せた感動的な人体発生学、つまり人類の個体発生は原始水に浮遊する魚のようであり、羊水の中の魚として胎児の「遊び」の面影を見せているという知見が背景にあったのかもしれない（拙著『中山みき「元の理」を読み解く』日本地域社会研究所、2007年、第５節「宇宙空間における意識変容―神人一体化の世界へ」460頁）。しかし、直截的には1969年の青年会総会で２代真柱様が力説されたお言葉がわたくしの魂を動かしたようだ。それはこういうものだった。月面にはじめて人類が着地したアポロ11号の話に触れて、「時代は人類が月に到達するようになった。あらきとうりょうのなかで、よし将来月面基地で伝道をやってやろうかという気迫を持つ天理青年はここにいるか」という意味の表現で発破をかけられたことは、強烈な理のある言葉としてわたくしの胸を突きぬいたのであった。

その15年後の1985年、１年後に執行される教祖百年祭を記念して開催する「コスモス・生命・宗教―ヒューマニズムを超えて―」と題した国際会議の天理でのプレセッションに、講演者としてアポロ９号のラッセル・シュワイカートを招聘するため、２代真柱様の言葉を胸に、アメリカ巡教の合間をぬって今シアトルにいると聞いた氏の自宅に電話をかけ、氏の家まで出かけ、彼の来日を説得したのである。その返す手でモスクワのシュワイカートの友人マカロフ宇宙飛行士に電話をかけ、二人を日本で会わせて、広島原爆記念公園に完成した国際会議場の竣工記念に「Only One Earth」というテーマで、中国新聞社や関係諸団体の協力を得て国際会議を開いたこともある。わたくしはシュワイカート、マカロフ、イワノフの３名を広島県呉市の倉橋島にも招き、来島記念樹と「現代の宇宙遣唐使」を意味する記念英文石碑を建造した。倉橋島は古には遣唐使船造船・修理所であり、戦艦大和や長門、武蔵などを作った場所としても有名であったからである。その後、アポロ12号で月面着地を果たしたコンラッドやゴードン宇宙飛行士など、十数名の各国の宇宙飛行士をおぢばに案内し、日本各地でシンポジウムや対談などを企画・実践したさまざまな出来事をいまなつかしく思い出している。３代真柱様には、宇宙飛行士全員に親しくお会いいただき、おぢばがえりのつど親ごころあふれるご歓待をいただいた。

（次号につづく）